

金城学院大学キリスト教文化研究所・公開講演会 2021年6月26日

# 東アジアにおける「自由の危機」とキリスト教 — 香港・中国大陸において「真実の生」を生きる者たち

The Crisis of Liberty and Christianity in East Asia;  
“Living in Truth” in Hong Kong and mainland China

松 谷 曄 介\*

Yosuke Matsutani

キーワード：①香港 ②中国大陸 ③キリスト教 ④信教の自由  
⑤真実の生

## 要旨

近年、香港・中国大陸・ミャンマーなど東アジアの諸地域では、自由を脅かす出来事が相次いでいます。自由な社会は決して当たり前ではなく、あっという間に失われていく危機と常に隣り合わせであることを、改めて思われます。こうした「自由の危機」の時代、私たちはいかに生きるべきなのでしょう。本講演では、特に香港と中国大陸において自由のために戦い、圧迫を受けたり投獄されたりしたキリスト者・教会の姿を通して、この時代にあって「真実の生」を生きるとは何かを、共に考えていきたいと思います。

---

\* 金城学院大学薬学部 宗教主事・准教授

## 1 中国大陸のキリスト教

### 1-1 中国大陸のキリスト教の概要

まずは中国大陸のキリスト教の概要をお話いたします。「中国」と「キリスト教」が結びつかない方も多くいらっしゃるかもしれませんが、実は現代の中国ではキリスト教信者数が急増しています。中国政府の公式発表によれば、2010年にはプロテスタントが2305万人、カトリックが570万人、合計2875万人だったのが、2018年にはプロテスタント3800万人、カトリックが600万人、合計4400万人に増加しています。プロテスタントに限ってみれば、2010年から2018年の増加率は約1.65倍にもなります。

しかし、こうした政府公式発表は、政府が合法的と認めている公認教会<sup>1</sup>の人数しか含まれておらず、非公認教会<sup>2</sup>の人数は含まれていないため、実際にはもっと多くのキリスト教信者がいると言われており、アメリカの研究機関ピュー・リサーチ・センターの2010年の調査発表では、プロテスタントが5800万人、カトリックが900万人、合計6600万人となっています。仮に非公認教会のプロテスタント教会の2010年から2018年にかけての増加率も公認教会と同様に1.65倍とすると、2018年のプロテスタント信者数は公認・非公認の両方を合わせて約9570万人となり、カトリックを含めると1億人以上という試算になります。アメリカのパデュー大学の宗教社会学者である楊鳳崗（ヤン・フォンガン）<sup>ようほうこう</sup>は、2030年には2億数千万～4億人にまで増加するのではないかという試算もしています。もっとも、

<sup>1</sup> 公認教会とは、政府に登録している合法の教会を指します。プロテスタントの公認教会とは、具体的には、「中国基督教三自愛国運動委員会」と「中国基督教協会」という組織に所属する教会を指し、これらは一般的には「三自教会」「三自愛国教会」「三自会」と呼ばれています。カトリックの公認教会とは、「中国天主教愛国会」と「中国天主教主教團」に所属する教会を指します。

<sup>2</sup> 非公認教会とは、政府に登録をしていない非合法の教会を指します。プロテスタントの非公認教会は通称「家庭教会」と呼ばれ、カトリックの非公認教会は「地下教会」と呼ばれたり、「忠貞教会」（ローマ教皇に忠誠を誓う教会と意味）と呼ばれたりしています。

これらはあくまで推計に過ぎませんし、やや楽観的過ぎる見込みのようにも感じますが、そうした推測がなされるほどキリスト教人口が急増している現状があるのは間違いありません。



(上海の公認教会・沐恩堂：松谷曄介撮影)



(浙江省の某非公認教会：松谷曄介撮影)

## 1-2 キリスト教の急増を警戒する習近平体制

中国政府は、こうしたキリスト教の急増に対して強い警戒感を抱いています。軍総参謀本部制作の宣伝動画「静かなる戦い」(2013年)では、自由貿易による「西洋文化」の流入を警戒するやうにという文脈の中で、キリスト教もその一部に含め、キリスト教信者が1億人に迫ると警告しています。『国家安全藍皮書』(2014年)では「西洋敵対勢力の中国に対する宗教滲透の方式は更に多様化・広範囲化しており、手段も多様化・隠蔽化してきている。……境外宗教滲透勢力は既にその触角を中国社会の各領域に伸ばしており、滲透態勢は益々激しさを増している」と明記されているように、キリスト教急増はもはや単なる宗教問題ではなく、国家安全保障にかかわる政治問題と位置付けられています。

2012年に習近平体制になって以降、公認教会と非公認教会とを問わず、中国政府のキリスト教に対する取り締まりが強化されるようになりました。2014年から翌年にかけて、キリスト教が盛んな浙江省において、政府に認可されているはずの公認教会の十字架が政府当局により強制撤去され

る事件が相次ぎ、こうした動きは2017年以降には内陸部の河南省や山西省にも広がりました。また2018年には宗教事務条例（2005年施行）が改訂され、統制がさらに強化される内容となりました。同じ2018年には、それまでは黙認状態だった非公認教会の中で、特に有力だった教会が各地で閉鎖される事案が相次ぎました。

### 1-3 公認教会に対する締め付け

公認教会に対する締め付けの強化は、特に中国の「エルサレム」と呼ばれる浙江省温州市（人口800万人中、約100万人のキリスト教信者）を中心とする地域で顕著でした。温州市を含む浙江省全体で2千ヶ所近い教会の十字架が、「違法建築」であることを口実に強制撤去されたと言われていますが、これに対して公認教会の指導者である顧約瑟（<sup>こやくしつ</sup>ゲー・ヨセフ）牧師が抗議の声を上げました。通常は政府に対して従順である公認教会の指導者が、政府に抗議するのは異例のことです。

すると、2016年1月、顧牧師は「資金流用」の冤罪で強制解任され、さらに2017年1月には逮捕され、一年間収監されるという事態にまでなってしまう。顧牧師は同年12月に釈放されたものの、こうした出来事は公認教会に対して大きな萎縮効果となったことは間違いありません。



（浙江省各地で起こった十字架強制撤去：「対華援助協会」HPより）

#### 1-4 非公認教会に対する締め付け

非公認教会に対する取り締まりの中で特に大きな事件は、四川省成都の秋雨之福聖約教会に対する大規模取り締まりです。同教会の王怡（ワン・イー）<sup>おうい</sup>牧師はかつて成都大学の憲法学の研究者でもあった人物で、牧師になって以降も、例えば天安門事件記念の6月4日には「国家祈祷日」を開くなど、様々な公共問題に対してキリスト教の立場から発信を続けてきました。教会運営の他に、独自の学校運営にも取り組んでいましたが、これらの活動はすべて非合法であったため、かねてより当局の監視対象になっていました。

2018年12月9日、成都市の警察当局は、王怡牧師夫妻をはじめ信者約100名を一斉拘束し、教会を閉鎖させました。他の信者や王怡牧師の妻はやがて釈放されましたが、王怡牧師自身は「国家政権転覆扇動罪」に問われ、2019年12月26日に懲役9年、政治権利剥奪3年、5万元没収の有罪判決が下されました。これは民主活動家でノーベル平和賞を受賞した劉暁波<sup>りゅうぎょうは</sup>（リウ・シャオポー）（後述）に対する罪名と同じであり、牧師でこの罪名で有罪になったのは、王怡牧師が最初の事例です。

## 2 香港のキリスト教

### 2-1 香港のキリスト教の概要

次に、香港のキリスト教の概要についてお話しいたします。香港のキリスト教人口は『香港年報』（2017年）によれば、プロテスタントが約50万人、カトリックが約38万9千人、合計約88万9千人、全人口740万人（2017年）に占めるキリスト教人口の比率は約12%です。かつてイギリス植民地政府が教育事業や福祉事業を、キリスト教をはじめとする民間団体に委託していたという歴史的背景もあり、香港の小学校から高校までの全校957校のうち約54%（2017年）、香港社会福祉協議会に登録している465機関のうち

約27%（2018年）をキリスト教系が占めており、このことから、香港社会におけるキリスト教の存在感の大きさをうかがい知ることができます。

## 2-2 雨傘運動

1997年、香港がイギリスから中国に返還されて以降、香港では「民主化」が大きな課題となっていました。というのも、「一国二制度」で従来の自由な社会制度が守られるとはいえ、政治制度の面では、政府トップである行政長官を民主的に選ぶ制度は整っておらず、また議会にあたる立法会の議員選挙は中国政府寄りが多数派を占める仕組みとなっていたからです。そのため、香港の自由を守るためには民主的な制度構築が欠かせないと考える民主派の人々が長年にわたり選挙改革運動に取り組んできました。

2014年、中国政府は香港の行政長官を「普通選挙」で選出することを認めるとしながらも、しかし実際に立候補できるのは中国政府寄りの候補者だけで、民主派寄りの人物はそもそも立候補できない仕組みを決定しました。これに対して民主派陣営は「偽の普通選挙」だと反発を強め、それが79日間に及ぶ市民の抗議活動、「雨傘運動」（警察が催涙弾・催涙スプレーを使用した際、デモ隊が雨傘でそれらを防ごうとしたことから、雨傘が運動の象徴となったことに由来する名称）へと発展しました。

同年9月末から12月半ばにかけ、若者を中心とする多くの市民が香港行政府付近の大通りを占拠し続けた抗議活動では、少なからずキリスト教が存在感を持っていました。現場には屋外祈祷所が設けられ、牧師や神父のみならず一般のキリスト教信者たちが静かに祈りを捧げたり、讃美歌を歌ったりする姿が見かけられました。また雨傘運動の呼び水となった民主化運動「オキュパイ・セントラル運動」の発起人の戴耀廷（ベニー・タイ、当時、香港大学副教授）と朱耀明（チュー・イウミン、バプテスト教会引退牧師）はキリスト者であり、もう一人の発起人・陳健民（チャン・キンマン、当時、香港大学教授）もかつては教会に属していたキリスト教に近

い立場の人です。彼ら三人は、オキュパイ・セントラル運動の発起会を教会で実施し、愛と平和を理念として運動を展開していくことを宣言するなど、非常にキリスト教色を帯びた政治運動を展開しました。このオキュパイ・セントラル運動は雨傘運動に合流する形になりましたので、戴耀廷をはじめとする発起人三人は、常に雨傘運動の先頭に立っていました。

さらには、当時、高校生でありながら雨傘運動のリーダーの一人として知られた黄之鋒<sup>こうしほう</sup>（ジョシュア・ウォン）は、キリスト教の家庭で育ち、彼自身、自分のキリスト教信者としてのアイデンティティを隠すことはせず、むしろ信仰が彼の政治運動・理念を支えていることを公言しています。



(2019年6月16日の200万人デモ：松谷暉介撮影)

### 2 - 3 逃亡犯条例改正反対運動

2014年の雨傘運動は香港の民主化運動の歴史における一大事でしたが、同運動は大きな政治的成果を得ることができないまま、収束してしまいました。その後、数年間、民主化運動は低迷していましたが、2019年に香港政府が立法会に「逃亡犯条例改正案」を提出したことを契機に、民主化運動が大きなうねりを見せることになります。それまで香港政府と中国政府の間に「逃亡犯条例」（いわゆる「犯人引き渡し条約」）がなかったのですが、もし同法案が可決されると、中国大陸の法律に違反しているという容疑がかけられた人は、その身柄が香港から大陸に移送されてしまう可能性

が出てくるのが懸念されました。多くの香港市民がこのことに不安と怒りを覚え、政府に対して100万人から200万人もの大規模な抗議活動を行ったのです。

しかし香港政府は、こうした市民の声に耳を傾けることなく、かえって大量の催涙弾やゴム弾などで抗議活動を取り締まろうとしました。しかし、当局のこうした暴力的取り締まりによって抗議活動が収束することはなく、むしろさらに多くの市民の怒りをかい、抗議活動はエスカレートしていきました。デモ隊の一部が過激になった面もありましたが、警察は必要以上に過剰な取り締まりを行い、時に実弾が使用され負傷者が出たこともありました。香港中文大学や香港理工大学では学内に立てこもった学生と警察の間で激しい攻防があり、まるで戦場のような状況になったこともありました。

## 2-4 香港国家安全維持法

2019年の終わりから2020年に向け、中国大陸の武漢が発生源ではないかと疑われている「新型コロナウイルス」(Covid-19)拡大の影響が香港にもおよび、飲食店のみならず諸々の大規模な集会在行政命令で規制されていくと、民主派陣営のデモ活動も困難になりました。そうした中、2020年5月、中国政府は香港の立法会の頭越しに「香港国家安全維持法」(以下、国安法)を制定することを突然発表し、同年6月30日に可決・施行されました。

国安法では「政権転覆／国家分裂／テロ行為／海外勢力との結託」の取り締まりが明記されていますが、しかし基準が曖昧なため、恣意的な起訴・逮捕がなされることが、当初より懸念されていました。案の定、同法施行後、一年も経たないうちに、当局による民主派に対する締め付けが急速に強化され、周庭しゅうてい(アグネス・チョー)や黄之鋒わうちえい(ジミー・ライ)など、著名な民主派陣営の逮捕が相次ぎました。海外へ亡命した民主

活動家も複数おり、またイギリスをはじめとする海外に移民する市民の流れも増えています。

## 2-5 香港国家安全維持法下の「福音宣言」

逃亡犯条例改正反対運動の際、雨傘運動の時よりも広範囲の市民が抗議活動に参加しましたが、特に警察の暴力的取り締まりが過剰であることに對して、キリスト教界の複数の教派や神学校が団体名で抗議声明を発表したのは画期的でしたが、しかし教会が組織的に一枚岩になって民主化運動に参加するというわけでは、決してありませんでした。というのも、聖職者の間でも信者の間でも、必ずしも政治的立場が一致しているわけではないからです。国安法に関しては、それを支持することを明言する教会指導者も一部見られるほどでした。

そうした中、2019年以降の状況を憂いていた有志牧師たちが2020年5月に「香港牧師ネットワーク」を結成し、「香港2020福音宣言」を発表しました。これは、かつてナチスの時代、ドイツの有志の牧師たちが教会の立場を鮮明にするために「バルメン宣言」を発表したことに倣って出された信仰宣言であり、形式もバルメン宣言と同様に六項目からなっています。

- 第一項 イエス・キリストこそ、福音そのものである。
- 第二項 イエス・キリストこそ、教会の唯一の主である。
- 第三項 教会は、福音を宣べ伝える証人の共同体である。
- 第四項 教会は、真理の柱また土台であり、虚偽を拒絶し、真理を堅く守る。
- 第五項 霊性と行動は、不可分である。
- 第六項 教会は、暗闇の時代にあって光の子である。

これら一つ一つは、教会としての基本的立場を再確認する一般的な内容

にも見えますが、国安法の成立を間近にした香港という文脈を踏まえるならば、特に第四項の「教会は、真理の柱また土台であり、虚偽を拒絶し、真理を堅く守る」という一文に表れているように、教会は「偽りの生」を拒絶し、「真実の生」を生きることを勇気をもって宣言したものと位置付けられます。(宣言全文や解説は [松谷曄介：2021, 35-88頁] 参照)

### 3 「真実の生」を生きる者たち

ここまで、中国大陸および香港のキリスト教を取り巻く状況について述べてきましたが、以下ではそうした中で、「真実の生」(ヴァーツラフ・ハヴェル)<sup>3</sup>を生きる人々の言葉を紹介したいと思います。

#### 3-1 劉曉波

劉曉波(1955-2017)は、中国の作家また民主活動家と知られた人物ですが、2008年に民主化を訴える「08憲章」を起草したことで「国家政権転覆扇動罪」に問われ、逮捕・投獄されてしまいました。獄中にいた2010年にノーベル平和賞を受賞しますが、授賞式には出席することができず、その後2017年にガンで死去してしまいました。劉曉波不在の授賞式では「私に敵はいない。私には憎しみもない」という彼の名言が紹介されたことは良く知られていますが、実はこの言葉は1989年6月に、彼が天安門広場で

<sup>3</sup> Václav Havel (1936-2011), チェコの劇作家、民主活動家。チェコスロバキア社会主義共和国の反体制派の指導者として活躍し、1977年には人権擁護を求める「憲章七七」の起草者の一人としても知られる。1989年、ビロード革命で社会主義体制が崩壊した後、チェコスロバキア連邦共和国の大統領に選出され、さらにはチェコスロバキア解体後、1993年から2003年まで、チェコの大統領を務める。「憲章七七」は、劉曉波(1955-2017年)たちが2008年に起草した「零八憲章」にも影響を与えたと言われる。ハヴェルはその名著『力なき者の力』において、全体主義に抵抗する道として日常生活において「嘘の生」を拒絶し「真実の生」を生きることの重要性を説いている。邦訳：ヴァーツラフ・ハヴェル著、阿部賢一訳『力なき者の力』、人文書院、2019年)。

ハンガーストライキを呼びかける際の宣言文でも既に用いられていました。2008年に逮捕され裁判を受けた際の陳述書で、劉曉波は次のように述べています。」

憎しみは人の知恵と良知を腐食させ、仇敵意識は民族を墮落させ、生きるか死ぬかという残酷な闘争を扇動し、社会の寛容さや人間性を破壊して、国家が自由と民主に向かうプロセスを阻害する。それゆえに、私は最大の善意をもって政権の敵意に向き合い、愛によって憎しみを消し去ることができるように望んでいるのだ。……私に敵はいない。私には憎しみもない。

劉曉波は洗礼を受けたキリスト教信者ではありませんでしたが、彼のこうした思想にはキリスト教の影響が見て取れます。彼の親しい友人でもあるクリスチャン作家・民主活動家の余杰<sup>よけつ</sup>（ユー・ジエ、2012年アメリカに亡命）は、「劉曉波の『私には敵はいない』という宣言は、彼の内面の深みにある大きな宗教的情感に由来しており、特に長きにわたって受けてきたキリスト教の影響による」と述べているほどです。実は劉曉波は余杰が通っていた非公認教会「箱舟教会」にも何度か出席したことがあるだけでなく、聖書をはじめ、アウグスティヌス、トマス・アキナス、マルティン・ルター、ジャン・カルヴァン、ディートリヒ・ボンヘッフアー、カール・バルト、ハンス・キュング、ドストエフスキーなど数多くのキリスト教書籍を読んでいました。

劉曉波の愛読書の一つにアウグスティヌスの『告白』がありますが、彼は同書の読後に「中国人の悲劇は神を持たないという悲劇だ」、「中国文化の最も致命的な誤りは、誤りを自覚しないことだ」、「中国人は神を持たないため、けっして悔い改めたり、罪を償ったりしようとしなない」といった考えを綴っています。

また劉曉波は自身が獄中に囚われている中で、ドイツの牧師・神学者で、ナチスへの抵抗運動に参加して逮捕・処刑されたボンヘッフアー(1906-1945)の『獄中書簡』を読んでいます。彼は同書の読後感を妻への手紙の中で、次のように書いています。

〔イエスは〕神性と人性を同時に兼ね備えた聖なる御子だからこそ、神聖なる価値に対する畏敬を持つことができ、この世的価値に対しては人道主義的な関心を持つことができた。神への愛と人への愛が一致するところにこそ、神の恵みの力が働くのだ。……たとえ何かを変えることができなくとも、しかし少なくとも私たちの行為は、イエスの精神が今でもこの人間の世界に息づいていることの証しになり、神なき現代社会においてイエスの精神のみが人間の墮落に対抗できる信仰的力となる、ということの証しとなる。……もし希望がないならば、苦しみの中から意義を見出せない。希望を理解できなければ人間の存在を理解できない。生きる勇氣は希望のみが与えることができ、希望は神と愛とイエスの十字架から来るのだ。……おそらく、私は永遠に信徒にはならないかもしれないし、組織としての教会に入会することもないかもしれない。しかしイエス・キリストは私の人格における模範だ。

劉曉波は、その生涯において洗礼を受けて教会のメンバーになることはありませんでしたが、イエス・キリストの人格・思想・生涯から大きな影響を受け、「真実の生」を生きようとしていたことは間違いありません。

### 3-2 王怡

成都の秋雨之福聖約教会の王怡牧師は、中国国内のみならず海外でもよく知られた、中国の非公認教会を代表する牧師の一人です。王怡牧師は中

国当局の取り締まりが厳しくなりはじめた2018年、自身が逮捕されることを予期し、「私の声明：信仰の不服従」という一文を準備していました。そして、もし逮捕され72時間たっても釈放されない場合にはそれを公開するようにと教会員に依頼していました。そして同年12月9日に実際に逮捕され、72時間たっても釈放されなかったため、教会のSNS上に同文が公にされました。（日本語訳全文は〔松谷曄介：2021、168-175頁〕参照）

以下はその一部ですが、信仰の不服従について、次のように述べられています。

この信仰的不服従を実践する時には、キリストの恵みと復活の力に依り頼まねばならず、また踏み越えてはならない以下の二つの限界線を遵守しながら行うことを聖書が私に求めている、と私は堅く信じる。

第一は、内なる心の限界線である。肉体に対する愛ではなく、魂に対する愛こそが信仰的不服従の動機である。環境の変革ではなく、魂の変革こそが信仰的不服従の目的である。いかなる時であれ、もし外的な圧迫や暴力が、私の平和と忍耐を奪い去り、教会を圧迫しキリスト者を辱める人々に対する怒りや苦悩を私の内なる心に抱かせるようになったならば、それは信仰的不服従が失敗してしまったことを意味する。

第二は、行為の限界線である。福音は信仰的不服従が非暴力でなければならないことを要求している。福音の奥義は、身体的に抵抗することに替えて、進んで苦しみを受け、不義なる刑罰を甘んじて受け入れることにある。平和的な不服従は、愛と赦しの結果である。十字架は、苦しみを受ける必要のないところで進んで苦しみを受けることを意味している。

なぜならば、キリストは抵抗できる無限の力をお持ちでありながら、すべての屈辱と痛みを耐え忍んで受けられたからである。キリストに

抵抗するこの世に対してキリストご自身が抵抗された方法は、十字架において、彼を殺そうとしているこの世に向かって、平和のオリーブの枝を差し伸べることだった。

ここには、キリストに忠実に従うことこそが「真実の生」であるという王怡牧師の確信、そしてそれに反する生き方には徹底的に信仰的不服従を貫こうとする王怡牧師の強い意志を感じ取ることができます。

### 3-3 崇一堂（杭州）の聖歌隊

浙江省における公認教会の十字架強制撤去に対して、その地域のリーダーである顧約瑟牧師が政府に対して抗議の声を上げ、その結果、顧牧師が強制解任されたことは前述したとおりです。

顧牧師が解任された直後の日曜日、顧牧師が主任牧師として牧会していた杭州市最大の教会・崇一堂（かつてチャイナ・インランド・ミッションが立てた教会の名前を継承）の聖歌隊が礼拝の中で「この道を共に歩もう」（原題：這條路上我們一起走）という讚美歌を奉唱しました。この歌は一般的には非公認教会で歌われることが多い曲であり、それを公認教会の聖歌隊が歌うというだけでも特別なことですが、さらにその時には敢えて歌詞の一部を変えて歌ったことが話題となりました。

元の歌詞は、以下のようなものです。

この道を共に歩もう、手を取り合って、苦難を共に担い、後ろを振り返らずに。

私たちは心をつにしてシオンの道を歩もう、中国のシルクを携えて。復興（リバイバル）の角笛が全地に鳴り響いている。さあ、収穫に行こう。

私たちは心をつにしてシオンの道を歩もう、中国のシルクを携えて。

勝利の角笛が全地に鳴り響いている。さあ、収穫に行こう。

聖歌隊は、アンダーラインの箇所を、「自分たちの十字架を背負って」と置き換えて歌いました。主任牧師が突然、強制解任されたという事件の直後なだけに、この歌詞の置き換えが何を意味しているのか、聞いている人たちには明確に伝わったことでしょう。この歌を歌う時に聖歌隊の一人ひとりの表情、そして歌声はとても心を打つものがあります。虚偽の罪名で牧師が解任されてしまう現実を前にして、しかしなお「真実の生」とは何かを、崇一堂の聖歌隊は証してくれているように思います。



(崇一堂の内観と外観：倉田明子氏撮影・提供)

### 3-4 黄之鋒（ジョシュア・ウォン）

香港の民主活動家といえば、日本では周庭が有名ですが、世界的には黄之鋒のほうが良く知られています。中学生の時から社会活動に参加するようになった黄之鋒ですが、彼はキリスト教の家庭で育ち、幼い頃から教会にも通い、時折SNSでは聖書の言葉を引用することもありました。彼は自身の信仰と社会運動について、次のように述べています。

私が社会運動に参加するようになったきっかけは信仰です。もし信仰がなければ、私は社会運動に参加することはなかったでしょう。もし

信仰がなければ、〔人間〕個々人の根本的価値を追求しなければならぬということ意識することはなかったでしょう。当然のことながら、個々人はみな平等であり、神が愛したもう存在であり、平等な待遇を受けるべきです。

彼は2021年に逮捕された際には、「この世を変えることができなくとも、この世が自分を変えることをさせないようにはできる」と語ったと伝えられています。彼は今も収監中（原稿校正中の2022年1月現在）であり、民主化運動を展開することで社会を変えることはできな状況ですが、少なくとも偽りの自分に変えられることなく、信仰に根差した「真実の生」を貫こうとする姿勢が見受けられます。

こうした黄之鋒の信仰と社会活動の背景には、クリスチャンである両親、特に彼の母親の熱心な祈りの支えがあることも忘れてはなりません。黄之鋒はこれまでも何度か収監されているのですが、2017年に一時期収監された際に、彼の母親は次のような公開メッセージを出しました。

愛する息子よ、聖書の言葉をよく覚えておきなさい。『体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい』（新約聖書・マタイによる福音書10：28）。信念をしっかりと持ち続け、持っている価値観を大事にしなさい。『義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる』（新約聖書・マタイによる福音書5：6）、『希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。』（新約聖書・ローマの信徒への手紙12：12）。

聖書の教えに従い続け、活きた命の証しを立てなさい。試練を通して、あなたの命がより強くなり、人間性の美しさと神様の愛と正義とをよりよく現すことができるようになることを願っているわ。

あなたの名前はヨシュア〔ヨシュア〕、お父さんと私が〔聖書からとって〕あなたにつけた名前よ！特にこの時、「ヨシュア記」の中で神様がヨシュアを励ました御言葉を忘れないように。どんなことにおいてもいつも自分をよく省み、真理に基づいて行動するならば、「強く雄々しく」（旧約聖書・ヨシュア記1：5-7）あることができるのよ。……あなたたちを愛している多くの家族・友人・香港人がいつもあなたたちを見守っているわ。

息子よ、あなたたちは決して孤独ではないのよ！ 母より

何度読み返しても、母の愛とその信仰の確信に、心を強く揺さぶられ、涙が出てきます。

### 3-5 戴耀廷（ベニー・タイ）

戴耀廷はオキュパイ・セントラル運動から雨傘運動にかけて民主化運動を牽引した元・香港大学法学部の副教授です（2020年8月に解雇処分）。戴耀廷は熱心なクリスチャンですが、信仰的・法律的立場から民主化運動に参与し、「この世の法律や制度における不正義に対する抗議運動は、聖書の教える『正義を行うこと』に合致するだけでなく、『慈しみを愛すること』また『福音を宣べ伝えること』の一つの方法である」と述べるほどでした。

戴耀廷は非暴力による「市民的不服従」を運動の基本理念としていましたが、自伝的著書『愛と平和—未完の抵抗の旅』（2020年、未邦訳）では「キリスト者にとって、信仰と抵抗はコインの両面のようなものである。その信仰は、不正義に抵抗しなければならない。また抵抗し続けることができるのは、その信仰のゆえに他ならない。抵抗なき信仰は自己中心であり、信仰なき抵抗は無力である」と述べ、彼にとっては不服従・抵抗と信仰とは切り離せないことであると明言しています。

戴耀廷は2014年の「雨傘運動」の首謀者の一人として2018年に裁判にかけられ、翌年、禁錮1年4か月の実刑判決を受けましたが、その弁論陳述の最後を次のように結んでいます。

もし、我々が有罪だとするならば、我々の罪名とは『香港がこのような苦難の時、なおも勇敢に希望を広めたこと』に他ならない。私は投獄されることを恐れず、恥ともしない。もしこの苦き杯を取り除くことができないのならば、私はそれを悔いなく飲み干すであろう。

戴耀廷は、イエス・キリストが十字架にかけられる前にゲッセマネの園で祈った言葉を重ねていることは明らかです。戴耀廷はその後、一時釈放されていましたが、国安法可決後の2021年に別の容疑で再び逮捕され、現在（原稿校正中の2022年1月現在）収監中です。（戴耀廷については〔松谷曄介：2021, 112-126頁〕参照）

### 3-6 黎智英（ジミー・ライ）

2021年6月に香港の主要メディア「リング日報」が廃刊に追い込まれたニュースは記憶に新しいでしょう。そのリング日報の創業者・黎智英は、2020年12月に逮捕され現在（原稿校正中の2022年1月現在）も収監中ですが、実は彼はカトリック信者としても知られています。民主化運動の先頭に立ってきたカトリックの司祭・陳日君（ちんにちくんゼン・ゼッキン）枢機卿と黎智英は親しい関係にあり、逮捕直前の2020年10月にも、両者はオンライン対談を行っていました。そこで黎智英は「カトリック信者として最も重要なのは、『神は決して私たちを見放されない』ということを知っていることだ」と、自身の信仰について語っていました。

2020年12月の逮捕後、雨傘運動の発起人の一人として民主化運動の牽引者の一人でもあった陳健民が、収監中の黎智英を慰問しました。陳健民は

その時の様子を、自身のSNSで次のように書いています。

彼〔黎智英〕はもっと早くこの危ない街から離れるべきだった、と皆言っている。しかし彼はガラス越しにこう語った。「私の命は私自身に属するものではない。もしその頃に遠くへ行ってしまうていたら、私は香港のためにこれほど多くの事をするとはできなかっただろう。」身なりを重視してきた彼が、今は古びた囚人服を着ている。それでもなお、彼は元気な調子で、「私は神の恵みの中を生きている！」と語った。彼は天の導きを信じているのだ。

### 3-7 崇学院神学院の学生たち

香港には多くのキリスト教学校があることは前述したとおりですが、香港中文大学という公立大学の中に崇基学院（Chung Chi College）というキリスト教系のカレッジがあることも、キリスト教が香港社会に根付いており、香港が中国大陸とは大きく異なる社会である象徴と言えます。近年、急速に香港の自由が脅かされ、「一国二制度」が形骸化しつつある中、こうしたキリスト教系の学校、特に公立大学の崇基学院がどのようになっていくのかも、香港の自由度を推し量るバロメーターです。

同学院には「崇基学院神学院」という神学校もあり、私は2013年から2016年にそこの客員研究員として在外研究を行っておりました。毎年11月、前年度の卒業生の学位授与式が行われたり、同窓会が開かれたりする「神学校日」という大きなイベントがあるのですが、2017年11月の神学校日では神学生たちが「善き力に、われかこまれ」という讚美歌を奉唱しました。この歌はあのディートリッヒ・ボンヘッファー（前述）が獄中で作詞した詩に、後にドイツ人作曲家ジークフイート・フィエッツがメロディーを付した曲です。神学校日のその日、香港地元出身の神学生と中国大陸出身の神学生たちは、この讚美歌を英語・北京語・広東語で力強く歌

いました。

(日本語訳：『新生讚美歌』73番)

- 1 善き力に 我囲まれ、守り慰められて、世の悩み 共に分かち、  
新しい日を望もう。  
※ (繰り返し) 善き力に 守られつつ、来たるべき時を待とう。  
夜も朝もいつも神は 我らと共にいます。
- 2 過ぎた日々の悩み重く、なお、のしかかる時も、騒ぎ立つ心静め、  
御旨に従いゆく。※
- 3 たとい主から差し出される杯は苦くても、恐れず、感謝をこめて、  
愛する手から受けよう。※
- 4 輝かせよ、主の灯火、我らの闇の中に。望みを主の手に委ね、来  
たるべき朝を待とう。※

なぜ神学生たちがこの曲を選んだのか、その理由を直接は聞いていません。しかし香港や中国大陸の政治情勢、また教会を取り巻く状況が厳しくなり、多くの虚偽に囲まれている時に、なお神の「善き力」に囲まれることで「真実の生」を生きよう呼びかけているように、私には聞こえました。

## まとめ

最後に、戴耀廷の親しい友人で、クリスチャンでもある法律家・張達明<sup>ちやうたつめい</sup>(エリック・クック・チョン、香港大学法学部首席講師)の言葉を紹介して終わりたいと思います。

2021年5月30日、張達明はある教会で「国家安全維持法が信徒と教会に与える影響」と題する講演をし、その中で次の趣旨のことを語りました。

すべてが「国家安全」という政治問題とされ、「闘争精神」が広がり、人々の愛の心が冷えきってしまう中で、キリスト者は誠実さを保って人と向き合うことが重要です。……「真の愛こそが最大の国家安全保障である」ということを証し、そのことを政権に知らしめましょう！

これからの香港や中国大陸では、改めて国家と教会、また信教の自由が大きな課題となることでしょう。確かに言論の自由など、さまざまな自由が危機に直面する困難な状況にありますが、「信じる自由」は誰にも奪うことができません。「偽りの生」が既成事実化されていく中で、キリスト教信仰・精神を支えに「真実の生」を生きようとする人々が、中国大陸や香港にもいることを私たちは忘れてはならないでしょう。

※参考文献（中国大陸・香港のキリスト教に関する書籍）

- ① 松谷曄介編訳『香港の民主化運動と信教の自由』教文館，2021年。
- ② 渡辺祐子監修／石川照子・桐藤薫・倉田明子・松谷曄介・渡辺祐子共著『増補改訂版 はじめての中国キリスト教史』かんよう出版，2021年。